

No. 67

1994 - 12

土佐の自然

発行 高知県保健環境部
自然保護課
高知市丸ノ内2-4-1
TEL 23-9610

題字 橋本 大二郎
印刷 中央印刷株式会社



石土池のハス・桑の川の鳥居杉（写真提供 国沢鎮雄・山脇哲臣）

目次

◇シリーズ

おらんくの自然

―その22―南国市編

南国市の自然

乾 常美

南国市の水と暮らし

中村 淳子

参勤交代道（領石―

ゴンニャク峠）の自然と地誌

山崎 清憲

コンクリート文明の

危機と骨材資源

―結びとして、南国市に眠る資源―

有田 正史

領石とナウマン

甲藤 次郎

南国市の野鳥

豊田 陽一

南国市の植物

稲垣 典年

南国市とその周辺の昆虫

川澤 哲夫

◇シリーズ

鎮守の森

―その四十八―

桑の川、地主神社々叢

山脇 哲臣

◇シリーズ◇

南国市の自然

おらんくの自然 — その22 — 南国市編

乾 常 美

南国市は、前は太平洋から奥は嶺南の山岳地帯にわたる縦長の地形であるが、その間に、物部川と国分川各流域の田園地帯がひらけ、海も野も山も、土佐のまほろばと呼ばれるにふさわしい古い歴史と伝統に培われた豊かな風土となつて形つくられている。

まず海。長さ八杆にわたる海岸線は、その昔の白砂青松の姿が、相次ぐ台風禍によって無残に潰え去って、一時は全線



前 浜 の 海 岸

高い堤防とテトラポット（コンクリート消波ブロック）がひしめき並ぶ荒々しい風景の連続であったが、昭和四十五年から始められた建設省の海岸整備工事によつて、長汀といわれる昔懐かしい渚の浜が、順次甦つて来つつある。

とくに物部川の河口から西へ四杆余りは、いまや昔を今に、長い砂浜に太平洋の波が白く打ち返して、遠く千年余の昔、「土佐日記」に紀貫之がしるした「大湊別離」の場面を、まざまざと想い浮かべることができる。

承平五年一月九日の早朝、貫之たちの舟は大湊を出る。追い慕つて来た人々ともいよいよ最後の別れである。貫之は深い感慨の中に、人々の志を感謝しながら日記に書いている。

「これより今は漕ぎ離れ行く。これを見送らんとて、この人どもは追い來ける。かくて漕ぎ行くまにまに、海のとりに留れる人も遠くなり、舟の人も見えなくなりぬ。岸にも言ふことあるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし」

「思ひやる心は海を渡れども文しなれば知らずやあるらん」

まことに日記中描写の圧巻である。

大湊の泊りが、現在地の何処であったか、「滄桑の変」という言葉のとおり、地形の大変化は、当時の巨港を地図の上から消しているけれども、まず現在の前浜という説が、学界や研究者の中で多数を占めている。しかし同じ南国市内の十市にも強い主張者がいる。いずれにしても、大湊が南国市の区域にあったことは間違いないと、私達も思うのであるが、貫之が、年末から正月にかけて九日間も滞在する程の港であつてみれば、付近の経済文化にもすぐれたものがあつたのであろう。

その証左のひとつのように、前浜から西方へ海岸線に沿う形で、伊都多神社、琴平神社、禪師峯寺、石土神社という風に古い社寺が連なっていることも、風土に深く根ざすものがあると思われる。

海岸段丘から目を北側の田園地帯に移せば、まず延長二、〇〇〇米の滑走路を持つ高知空港がひらける。紀貫之が五十五日間を費した京への舟旅も、いまは大坂へは四十分で着く空の旅の発着場である。文明の進み方は激しいが、この滑走路の地下には、田村遺跡群といわれる弥生時代の広大な文化が眠っている。土佐稲作の発祥地として、弥生のムラが地中

から掘り出されて、天下の耳目を聳動させたが、現代人と弥生人と対面という歴史的なドラマを残して、遺跡群はまだ地中に埋め戻された。

この空港の北に接する田村の庄は、中世も南北朝時代、一三八〇年、土佐守護代となつた細川氏の居城があつたところ。一世紀半の間、田村は政治経済文化の中心であつたが、細川四代にして守護職政治は消え、いまは細勝寺付近に、その城跡を残すのみとなつている。

この辺一帯の田園は、香長平野の重要部分を占める穀倉地帯であるが、全国的に名声を博した二期作も時代の夢となり、それに代る園芸産業の隆盛によつて、南国経済の生命線になつているが、これも自然の恩恵豊かな田園あつての賜である。

さてこれから、土佐のまほろばのまほろば、という古語にふさわしい南国の自然を辿らねばならない。地形的には、物部川流域の各支流地帯が形づくる長岡台地を北側へ下りて、国分川流域に抜がった野に山に、それはある。

環境庁と四国四県共同で選定整備している「四国のみち」（四国自然歩道）の一環である。土佐まほろばのみち、は、JR土佐山田駅から岡豊山に至る一〇・五杆の区間である。このうち、土佐山田町にある谷桑山重遠の墓と野中神社（お婉堂）を経て、七・五杆、南国市比江に



比江麿寺跡

ある比江麿寺塔跡から、この自然のみちを歩いてみよう。

比江麿寺、寺の名前は残っていないが、いま国分川の堤防に近い比江の里道に接して、約二〇〇坪（七〇〇平方メートル）の小公園の中央に、畳一枚位の大きな石が掘られているが、これが白鳳時代、この地に建てられていた寺院の塔跡。つまり塔の礎石で、中央に径八・センチ、深さ九センチの丸い穴が掘られ、これが塔の中心柱の礎石であって、直径から推定される五重の塔が聳えていたのである。白鳳と言えは七世紀の後半、奈良の法隆寺と同時代、同形式の伽藍（がらん）があったことは、礎石を中心に行われた発掘調査で判明した。白鳳時代の史跡として、国の指定を受けているものは、県下にこの塔



比江麿寺伽藍の想像図（原画 大野竜夫氏）

跡のみであるが、さらに最近、隣地の旧製紙会社跡地の発掘調査によって、十万点にのぼる古様式の瓦が出上している。

その調査はまだ続けられるようだが、この比江山麓に、白鳳文化の遺構が、復活再現されることを夢見るには、十分な礎石のたたずまいである。

ここからわずか五〇〇米の西方に位置するのが、奈良、平安の時代に数百年間土佐の都としての国庁があった県の指定史跡「国衙跡」。いま一面の田園地で、稲作よりも園芸用ハウスがぎっしりと並んでいるこの地帯には、ホノギ（小地名）に、昔都ありきを証する名が土地台帳にしっかりと残っている。曰くコクチョウ・ウチヒヨシ・フチウ・カウノキドなど。



国庁跡

その広さは四町四方とも、六町四方とも言われるが、国の重要遺跡発掘調査事業として、昭和五十四年から掘り続けられているこの辺の土中からは、それぞれホノギにあさわしい遺構、出土物が現れているが、未だ政庁の中心を示す正殿の跡は出ていない。

国衙（こくが）とは、国庁の庁舎とその付属建物を併せての呼称であるが、国司の館跡は字ダイリにある。ここが近時紀貫之邸跡と言われるようになったのはそれなりの理由がある。

王朝屈指の歌人であった紀貫之が四十八人目の国司土佐守となつて、南海遊遠の比江の地に来たのは、延長八年（九三〇）一月のこと。四年の任期を終わつて、京へ帰る時の船旅をしるしたのが「土佐



紀貫之邸跡

日記」。前述「大湊」の項でも述べたように、千年余の昔、はじめて土佐の風土と人情を、世に広く伝えた文学者として有名であるが、在任中の善政や文学者としての人となりも、よく文中に表されていて、後世の人々にも敬慕讃仰する者多く、現在国司館跡約一〇〇坪（二五〇平方メートル）の小公園に建つ五基の碑は、みな紀貫之の偉業を顕彰するものばかりであり、ここが紀氏邸跡と呼ばれるようになったのである。

歌人紀貫之は、この館から南方三百メートルにあった国庁の殿舎へ、毎日政務をとりに通つたであろうが、往時茫茫。まほろばの道を歩みながら、貫之の心情を推しはかってみるのも、またよい趣向ではなからうか。



卵塔

国司館から程近い北側の比江山には、史跡も多く、国司勸請と言われる日吉（ひえ）神社、長宗我部悲運の将、比江山親興の城跡などもあるが、まほろばのみちコースにあるのが、永源寺と卵塔。

時代は下って土佐藩政の初期、この辺り帯四千五百石を領したのが、山内家の家老乾備後和三であった。その菩提寺が永源寺で曹洞宗の禅寺として、参禅の人も多い。この寺の背後にある墓地が、通称卵塔。卵塔とは逆卵形の石碑を、畳石の台の上に置いた墓碑のことで、この墓域約三三〇坪（一、〇〇〇平方米）に、乾初代家老和三から、五代の大墓碑が並立し、その後方には後世の一族墓が並んでいる。「乾の人墓」として封建時代の権力の象徴ではあるが、いまは三〇〇年の



国分寺

風雪に耐えた時代の遺構として、ここを訪ねる人々には、今昔荒涼の感漂う中に、時代の転変を偲ぶ静寂を味わうことができよう。

永源寺の境内から、西方を望めば、田圃の中に、大きく盛り上った森の姿が見られるが、これが国分寺。国庁跡からまほろばのみち一二軒にある。

奈良時代、聖武天皇勸願の寺として、天平十三年（七四一）頃創建されたもので、現在四国八十八ヶ所第二十九番の札所である。創建当時の土塁が外周に一部残っているために、寺域全体が国分寺址として国の史跡に指定されているが、最近の発掘調査で、往時の寺域は、さらに北の方へ広がっていたことが判った。ここには奈良、平安時代の文化の姿が、

二〇〇年の法燈の中に、いまも息づいている。

まず金堂（本堂）建物は、国指定の重要文化財。長宗我部時代の永禄元年（一五五八）、国親、元親父子によって再建されたのだが、鎌倉期の建築様式を遺憾なく発揮したものとされ、屋根は土佐では異例の寄棟造こけら葺。最近新しく葺き替えられて面目一新。内部の作風にも異色の特徴を示し、内陣に安置される薬師如来立像二体は、平安期と鎌倉期の作で共に国の重要文化財。さらに一隅に置かれた梵鐘一個は、創建当時の古式を伝える重要文化財であって、日本に現存する国分寺三鐘の一つとして価値は高い。

東大寺を総本山とするこの寺の形式は、八十八ヶ所中でも、風格高いたたずまいを見せ、新築された書院の屋根両端には鴟尾（しび）が高々と聳え、古趣豊かな庭園の作りと相俟って、新しいものが占めるものへ渾然と融け合っている。

まほろばのみちコースも終わりに近く、国分寺の山門を出て、西方二八軒の岡豊山を目ざして、さわやかな田圃道を歩く。東バイパスの下を通り抜け、岡豊橋の北詰から県道を横切り山麓の東側を回り、県立歴史民俗資料館入口の坂道を登れば岡豊城跡はもうすぐ目の前だ。

歴史民俗資料館の開設と同時に、県指定史跡の岡豊山は、精密な発掘調査と、

自然景観の整備がなされているので、まほろばのみちのラストを飾るにふさわしい環境である。

山頂の城跡は、長宗我部氏歴代の居城であった。城と言っても、戦国中世の山城であったから、後世のような天守閣を持つ石垣の城廓はなかったが、それに移行する前の、すぐれた中世の山城が築かれていたことが、発掘調査で判った。第二十一代元親が、土佐を統一し、さらに四国制覇を夢見たのが、この城であって見れば、いま山頂の城跡から、四方を眺める感懐には、人それぞれに胸に去来するものが多いと思う。

ことに南方から東方にかけての展望は素晴らしい。眼下に国分寺、国衙跡を核とする国府史跡地区が手に取る如く、は



岡豊山から東方の展望（中心に国分寺の森）

るか東南に連なるのが田村遺跡群。南には紀貫之船出の地大津も間近く、展望は限りないロマンを呼ぶ。まさに「土佐のまほろば」である。

これでまほろばのみちコースは終わりとするが、南国市の自然は、これから北方の山岳地帯にかけて、まだ幾つかの見べきものを示している。

まず岡豊山のすぐ北側の山々には、船山古墳群の眠る大平山があり、小蓮古墳も近く、また最近、四国横断自動車道の開設工事に伴い発掘調査された定林寺長畝古墳は、県内最古の前方後円墳であつて、四世紀から六世紀前半の三時期の墓が同居するという全国でも特異の古墳として、学界の耳目を集めた。いずれこの地を治めた豪族首長の墓であろうが、この辺の古い文化を如実に物語る古墳の続出は、南国市の歴史をさらに層の厚いものにする事となる。

南国市の自然については、まだこれから北方山岳地帯について述べねばならないし、また私も調査員の一人となつて「参勤交代北山道」の南国市分についても取り上げねばならないけれども、本特集の執筆予定を拝見すると、「参勤交代のみち、領石―権若峠」については、その道の先達山崎清憲氏が担当することになっているので、これ幸いとその方にお任せすることにした。また私の住所

左右山地帯にも関係のある「領石とナウマン」については、これも地質学の権威、甲藤次郎先生が書かれるようで、私も大いに期待する次第である。

そこで本稿最後の部分は、編集者から要望もあつた毘沙門の滝と瀬戸の滝について記すことにする。

毘沙門の滝は、前述定林寺長畝古墳の西方程近く滝本集落の奥にあつて、高さ三〇米、三段にわかれて落ちていくのが特徴であるが、近時上流の状況変化か、水量が往時ほど豊かでなくなつていくのが惜しい。何しろ昔弘法大師が、大津の港に着いたとき、滝の音を聞いてここを訪ね、毘沙門堂を開祀したというから、大量の水勢であつたと推察される。

長宗我部元親が盛であつた頃、ここには大規模な滝本寺があつたそうである。いまは観光的に開発され、付近にモートルや新興の寺院ができていくけれど、滝の前は池となつて、緋鯉が群れ白鳥が泳ぎ、周囲には老木が茂り、紅葉の頃は、鮮やかな色彩が実に美しく、清遊の地として絶好の南国市指定の名勝地である。

さて最後に瀬戸の滝であるが、南国市も奥深く、穴内川がダムとなるあたりに注ぐ桑の川の上流に落ちるのがその滝である。里道から岩間の坂道を少し登ると滝を見ることができ、大きな岩石が両側に迫つて、高さ約三〇米の全容を写

すには、カメラの位置に工夫を要する。夏なお寒い景勝地であるが、秋の紅葉は格別である。

なおこの滝から約二軒下つたところにあるのが、昨年県の天然記念物に指定された鳥居杉である。桑の川地主神社の参道石段を挟み、樹齢三〇〇年内外の二本の杉の枝が、地上四―五米の位置で、幅

南国市の水と暮らし

中村 淳子

南国市は、北には剣山系の山々が連なり、南には香長平野が広がって太平洋に開いています。山から海に向かって流れる国分川や物部川などに潤された土地では、古くからたくさんの人々がさまざまな暮らしを営んできました。更に近世には山田堰を取出口として、灌漑用水・舟運路の役割を担う舟入川なども引かれています。

かつて米の二期作が盛んに行われた香長平野では、早春に川干と呼ばれる行事があります。山田堰からの灌漑用水を止め、干あがつた水路を地域総出で掃除し補修するのです。干あがつた川や溝のフナやハエを網ですくうなどして大人も子どもも楽

三、二米にわたつて連結し、まさに中国の詩長恨歌にある連理の枝そのものを、H状の実物として見ることが出来る。

(鳥居杉については、別に本誌「鎮守の森シリーズ」へ山脇哲臣氏が詳しく書かれています。)

(元郷土文化会館館長)



田を潤す水路

「川干の頃、カラッ風が吹く。」という言葉を土地の方に教えていただきました。自然の中のの仕事や遊びは、季節や気候に対する繊細な感覚を育くんできたのでしょうか。

この南国市に暮す人々が、どのように自然の恵みを活用し、また、自然をどの

ようなものと認識してきたのか——その一端にふれるために、水辺で祀られている神さまにご登場ねがいます。

水田が広がる香長平野では、水辺にさまざまな作神、田の神が祀られています。田の水口で祀るオサバイサマや、今回ご紹介する荒神さんなどです。

南国市の水田のあちこちに、樹木が何本かかたまつた小さな森がみられます。苗の薄緑の中に、すつくと立ち上がった濃い緑が印象的です。これらは、土地の方が荒神さん、杜日さん、お神母さんなどと呼ぶ神さまの森です。拝殿や絵馬堂がある大きな神社とは異なり、これらの神社は榎や杉などの樹木に囲まれて小さな社だけが建てられていたりします。作



南国市吉田の荒神さん

神とも水の神ともいわれ、田を潤す川や水路などの水辺に多くあります。

南国市岡豊町の吉田には、荒神さんが祀られています。荒神さんは田の神だということ、吉田の集落の中でも農業を営んでいる家の方がその氏子です。祭日の春と秋の杜日には、森の入口に幟が立てられ、一升枥にいっぱいのおはぎなどが社の前に供えられます。

古くから続けられているまつりですが、さまざまな変化もみられます。新しいところでは、まつりの後のお客（酒宴）は、氏子の高齢化などによって、肴の準備が大変だということで昨年からやめてしまつたということです。また、かつて荒神さんの森は子どもたちの恰好の遊び場で、藤カズラの巻き付いた大きなドウネリの樹に登ったり、台風で倒れた杉の洞に入ったりして遊んだものですが、今では遊びも様変わりし、子どもたちの歓声が荒神さんの森から聞こえることはほとんど無いということです。

この吉田の荒神さんには、万度社、神母神社の別名があります。土地の方が呼んでいるのは荒神さんですが、正式名称として神社庁に報告されているのは万度社。更に、明治のはじめ頃、吉田にあった寺子屋の先生が作ったという図表には、荒神さんのところに神母神社鎮座と記されています。こうした名称の違いは時の

流れによる変化なのでしょうか、それとも集落内部の人が属する集団の多様性によるものでしょうか。いずれにせよ、簡単にそぎ落とされたくない、その土地ごとの事情の存在を感じさせます。

エンコウは、水辺に出現し、人や馬に危害を加える妖怪とされています。人や馬を川に引きずりこもうとしたエンコウが、逆に人につかまってこらしめられてしまふといった伝承が各地に残されています。

南国市の後川の流域では、毎年六月の第一土曜日にエンコウ祭りが行われています。各地区の子ども組が菖蒲や松の葉などで仮小屋をつくります。子ども組では、年長者が幼少の者を指導し、前もって決めてある役割分担に沿ってまつりの準備を行います。仮小屋の中にはキウウリや酒が供えられ、陽が傾くと仮小屋の提灯の明かりが灯ります。地区の人々は仮小屋の前で手を合わせておまいりし、子どもたちは花火に興じます。

エンコウ祭りのときに、水死者の供養のために棚をつくり供え物をするという地区もありました。水は豊穣をもたらすものである反面、危険なものであり、エンコウや死者といった神霊を祀ることによって、これを鎮め、危険を防ごうという心意なのでしょう。エンコウ祭りの



後川の流域で行われるエンコウ祭り

翌日から川で水遊びをしてもいいといわれます。

川を下って、今度は海のエビスサンをご紹介します。エビスサンは竿を持ち、釣った魚を脇に抱えた姿をしています。大漁をもたらす神として、漁師から厚く信仰されてきました。

エビスサンの神像は、木彫りや石造などさまざまです。南国市十市の漁業協同組合の前に祀られているエビスサンは、厚い板に浮き彫りされたレリーフ形式です。この形式は高知市や吉川村など県中央部に多いという地域性がみられます。エビスサンには面白い伝承があつて、他所のエビスサンを盗んで祀ると大漁になるなどといわれています。そのため、



白髪の好々爺は南国市十市のエビスサン
(写真は歴史民俗資料館蔵の複製資料)

十市では盗まれないようにとの用心から、カラクリのある社に祀られています。

歴史民俗資料館に展示する複製を作らせてもらうために、十市のエビスサンを社から取り出し裏側を見せていただいたところ、嘉永四年(一八五二)の年号と橋田大次将基という作者の名前の銘がありました。江戸時代の終わりにエビスサンを刻んだ橋田さんとは、どのような人生を送った方なのでしょう——いつかその軌跡を辿ってみたいと思います。或る人生が時代を雄弁に語ってくれることもあると思うからです。

また、旧暦一月一日は十市のエビスサンの祭日ですが、地曳網漁が盛んだったこの地域も漁業不振で、かつてのようなまつりの賑わいは見られないとのこと。近年他所のエビスサンが合祀されましたが、これは網漁の衰退でその地では祀れなくなったためです。魚が少なく

なつたという声を各地で聞くたび、自然と人間の共生の難しさを再認するのです。以上、南国市の水と暮らしに係する水辺の神さまをみてきました。「それぞれの神さまには、なぜ他の地域の神さまと似ているところや違うところがあるのだろうか。」「そもそもなぜ現在でもこのような神問が次々に湧いてきます。

迷信だと一笑にふすのは易しいことです。しかし、さまざまな疑問を考えていくうちに、人々の自然認識やその地域の暮らしの在り方、歴史がこうした神々の背後にあることがわかってきます。そして、人々は意識しているにせよ、意識していないにせよ人間一辺倒でなく人間以外の第三者の視線を、これらの神々を祀ることで暮らしの中に導き入れているようです。卓越した自然認識がその中に含まれています。迷信だと一笑にあず人は、自分の現在の暮らしを客観的にみる視線はないのかもしれない。過去もし、私たちの現在の暮らしが、過去とは何の関わりもないものならば、歴史を知ろうとする必要はありません。また、現在と関わりなく未来が造られるものならば、私たちに未来の人々に対する責

任がありません。けれど、過去と現在と未来は結ばれています。私たちが歴史に眼差しを注ぐのは、まさにそのためだと思えます。きらめく海、山、川、平野——この豊かな自然の中で培われた生活文化

参勤交代道(領石—ゴンニヤク峠)の自然と地誌

山崎清憲

参勤交代北山道が南国市を通過するコースのうち、領石よりゴンニヤク峠までの道筋については、幸いにも「瓶岩村誌」に「ホノギ」や「渡瀬(わたせ)」のことが、くわしく記録されているので、現状と対比しながら参勤道の自然と、その周辺の地誌などに触れてみたい。

国道三三二号線の領石橋手前から北に入ると、すぐ左手に「天満宮」がある。入口には自然石の石灯ろうが建っており「天晴」の私年号の刻まれているのが興味深い。この地は国見越え本山道の基地であり、「領石口番所」が置かれていたところであるが、藩主参勤通駕(が)の節に、休憩所にあてられたと言われる大塚家の跡があり、また藩主の狩猟のさいには、数日間滞在することもあって、里

の歴史の中に、未来への意外な可能性が潜んでいるのではないだろうか。水辺の神さまは、そんなことを私たちに教えてくれているように思います。

(歴史民俗資料館学芸主事)

人は大塚家を「領石御殿」と呼んでいたという。

領石川の右岸を進むと、第一の渡渉点である「一ノ瀬」に着く。ここに二つの堰があるが、上手の堰が「一ノ瀬の渡瀬」であろう。「瓶岩村誌」によると「川幅十五間(二七m)水清冽、物ヲ酒(さらす)べし、河床浅低ニシテ……」とあるので、昔は美しい流れの浅瀬であり、通行人は石を伝って川を渡ることもなるが、参勤交代の場合、こうした渡瀬には板橋を仮設したという。一ノ瀬の対岸は「六崎」である。ここに「上拂殿」「下拂殿」の「ホノギ」が見える。「瓶岩村誌」には「祓殿(はらいどの)」とあり、すぐ上流の亀岩に鎮座する「清川神社」との縁故が考えられる。やがて上流に橋が見



一ノ瀬 (一ノ瀬渡瀬)



楠木橋 (楠ノ木渡瀬) 向う古城



亀岩川のカメ岩 (飯鍋岩)

えだす。「楠木橋」である。ここにはかつて「楠木渡瀬」があったという。昔、川岸に楠の太木があつて、その一枝が川を越えて宍崎側に垂れており、大水で渡渉ができない場合、身の軽い者はこの枝を伝って往復したと伝えられている。橋を渡ると右に小高い森が見える。「古城」と言われるところで、堀り割りの小さな坂を越えると農地の広がりが見える。この辺りが「金剛殿」であり、「清川神社」参拝の者はここで草履を脱いだと伝えられている。なお附近には「鹿遊」の地名も見えており、東方の「戸山」にかけてこの辺り一帯は、藩の狩場であつたといふ。

南国、伊野線の車道分岐点には素朴な石灯ろうが点景を添えており、亀岩川の

対岸には瓶岩村名の由来と言われる瓶を倒した形の大岩が見える。大岩の上手が「瓶ノ本渡瀬」であり、参勤道は東岸に渡つて「坂本」を過ぎ、「山ノ神」にでている。ここが亀岩川と奈路川の合流点であり、緑濃い山峡を北に進むと右に、高さ三〇mほどの大岩壁が見える。藩主

お茶屋場の「石ノ休場」(いしのやすば)である。北に少し回りこむと「中谷川」と「五良兵衛川」との合流点に着く。この辺りが「左手渡瀬」であろう。土橋を渡つて右岸に出ると、田態を残した参勤道が川添いに北に向かっている。この辺り谷の流れも美しく、浅瀬には魚とりの梁(やな)らしきものが仕掛



石ヶ休場 (藩主参勤交代道のお茶屋場)

けてあり、飛び石の渡瀬も二、三箇所見られるが、「中渡瀬」の位置は、はつきりしない。谷を右に渡つて車道に出ると「釣瓶」と「栲」の分岐に出る。参勤道は栲山川を渡つており、「下着渡瀬」が確認されるが、近くには「地藏渡瀬」のあ

谷の中州に地藏のホコラが見られる。谷を渡つて釣瓶への車道に出ると、すぐ「ゴンニヤク峠」への登山口が見える。

北山越え参勤道は「ゴンニヤク峠」「国見峠」「笹ヶ峰越え」の三つの山嶺を越えなければならぬが、第一の難関がここ「ゴンニヤク坂」であり、殿様道らしく、その旧態を残している。道幅は二、三mで桶状になつており、傾斜の急な斜面ではつづら折りの道になつている。標高三五〇m地点から平坦な肩道となるが、この辺りが「中休場」である。中休場を過ぎると支屋根の急坂となり、道が深くえぐられて谷状を呈しているところも見られる。小谷を過ぎると、南国市と十佐山田町の境界線の尾根に着く。ここが標高六〇〇mの「ゴンニヤク峠」であるが、「栲若峠」とも書かれており、「十佐州郡志」には「崑嶠峠」の字を当てている。地名の由来は定かでないが、「国府村史」には、延暦官道の「五橋駅」を比定し、約音から転じたもので、頂上の広場を「オムヤマトコ」と記している。峠附近は植林におおわれているものの、幅の広い尾根道が東西に続いており、「お茶屋場」のあつたことが想像される。

参勤道はこれより下りとなり、鶏石を経て、穴内川に下っている。

(高知県山岳連名顧問)

コンクリート文明の危機と骨材資源

——結びとして、南国市に眠る資源——



有田 正史

久しぶりに高知に恩師を訪れて、町の景観がすっかり変わってしまったことに驚かされた。しかしながら、私が学生時代を過ごした高知と比較するから、思い出の証拠物件の消滅に一抹の寂しさと驚きを感じるのであって、高知の町の変貌はコンクリート文明を謳歌している現在の我が国においては当然なことであらう。

円磨された小石という意味とは別に、劇場などで子供の見物人をさす隠語とある。この転用は子供料金は大人の半額なので沢山はいつでも儲けにならないことによるものである。しかしながら、砂利・砂がコンクリート文明を維持するために大量に採取・利

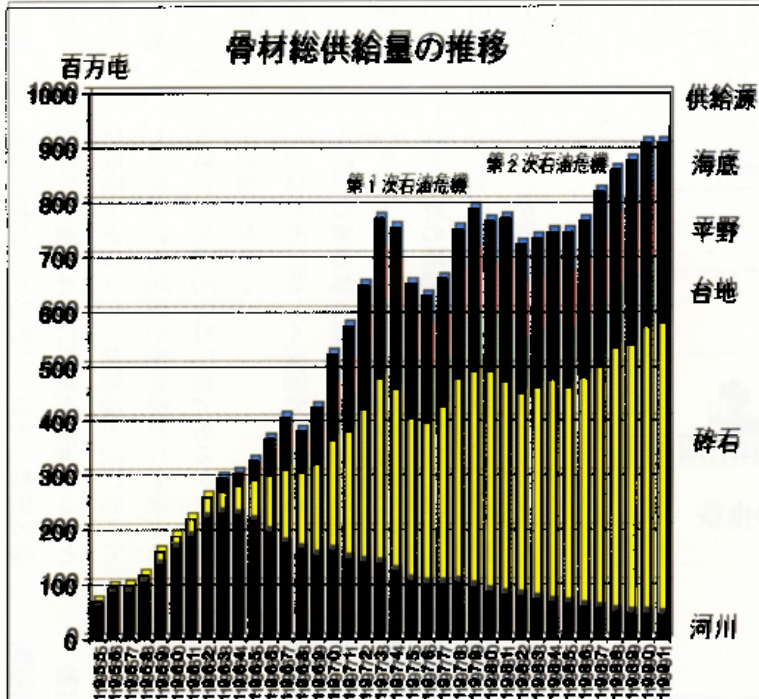
用され、建物、橋梁、道路、堤防などに形を変えて、我々の生活に恩恵を与えていることは厳然たる事実であり、砂利・砂に対する価値観を再認識する必要がある。我が国の骨材供給の現状

第一図に我が国の骨材の総供給量の推移を示してある。骨材が使用開始された当初は一億トン未満であったが、その後の目覚ましい経済復興を反映して急激に増加し、現在では九億トンを超えている。コンクリート構造物には寿命があり、一定の年限が過ぎると作り替えることが必

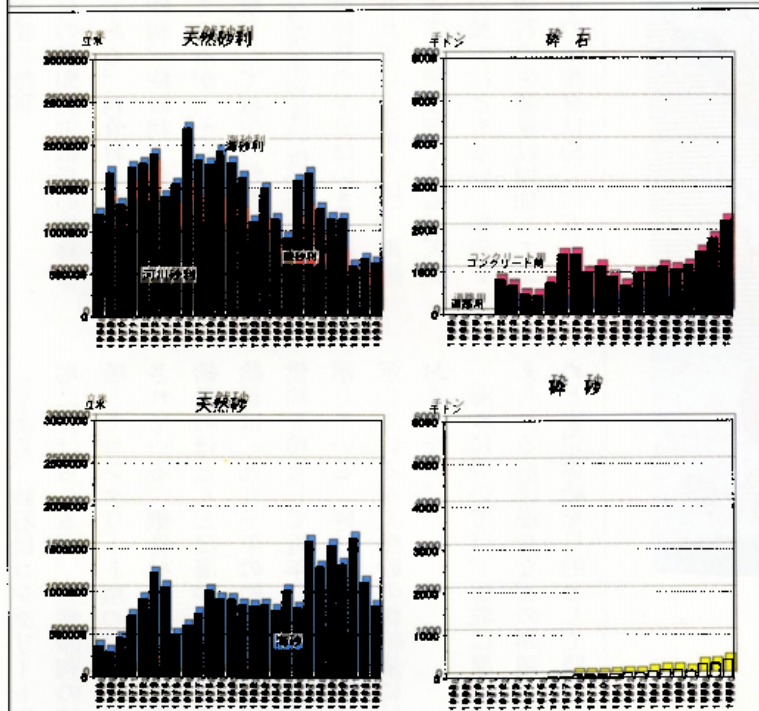
要であり、また、コンクリート廃材から骨材を再生できないことを考慮すると骨材の需要量はさらに増加し続けるであろう。すなわち、コンクリート文明の将来は骨材の安定供給が可能か、どうかにかかっている。

河川域は良質な骨材の供給の主役であったが、資源の枯渇および採取規制などにより、その後の需要量の急激な増加に対応できなくなった。このために、骨材の新しい供給源として開発されたのが台地や平野の地下および海底に眠っていた砂利・砂と砕石である。粗骨材は天然砂利

コンクリートは粗骨材、細骨材をセメントで糊付けしたものであり、骨材を抜きにしてはコンクリート文明は語れない。これらの骨材は完成したコンクリート構造物の内部に隠されているために一般的にはセメントほどにはその重要性が認識されていない。さらに、粗骨材・細骨材と言う言葉を砂利・砂に置き換えると骨材の重要性の認識の度合はさらに低下する。その理由は、砂利・砂という言葉はどこにでもあり、役に立たない物の代名詞だからである。国語大辞典で「砂利」という言葉を引くと



第1図 我が国の骨材総供給量の推移



第2図 高知県の骨材供給の推移

の減少にともない供給源を碎石に移行させてきたが、細骨材は砕砂が生産されているものの、その需要量のはとんどを天然砂に依存しなければならぬ現状にある。

現在、細骨材の観点からみれば、西日本の海砂文化と近畿以北の山砂・陸砂文化に大別される。

地域ごとに、砂の供給源が異なる理由は陸域における段丘地形と平野地形の発達が地質学的に偏在していることによる。西日本の海砂開発は段丘および平野の地形が発達しないための必然的帰結であろう。

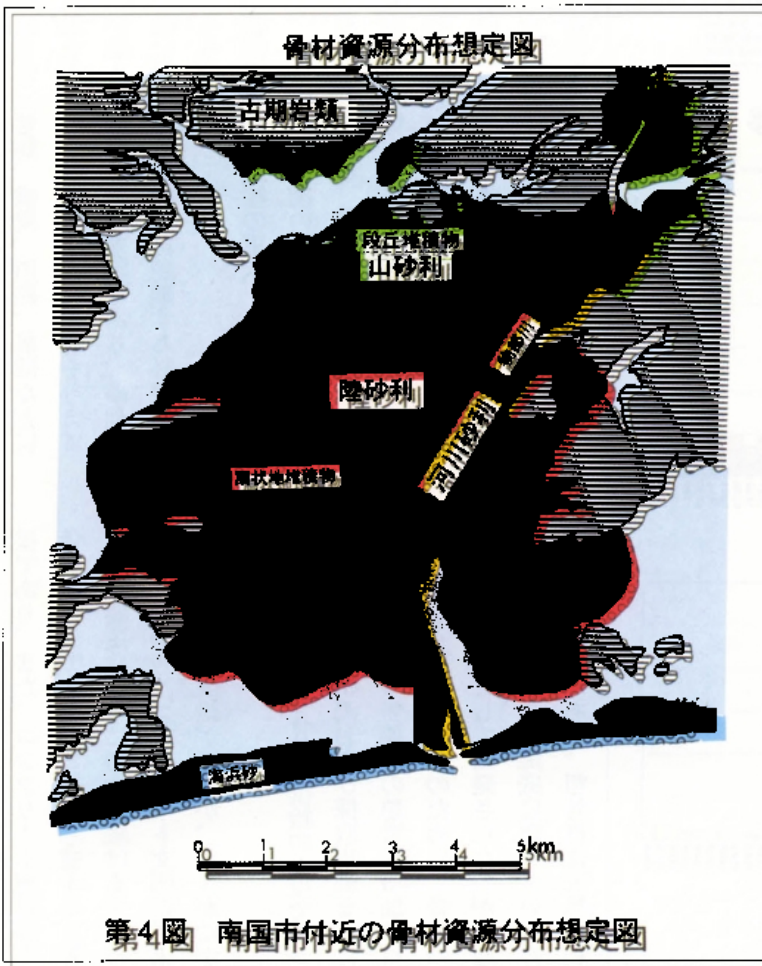
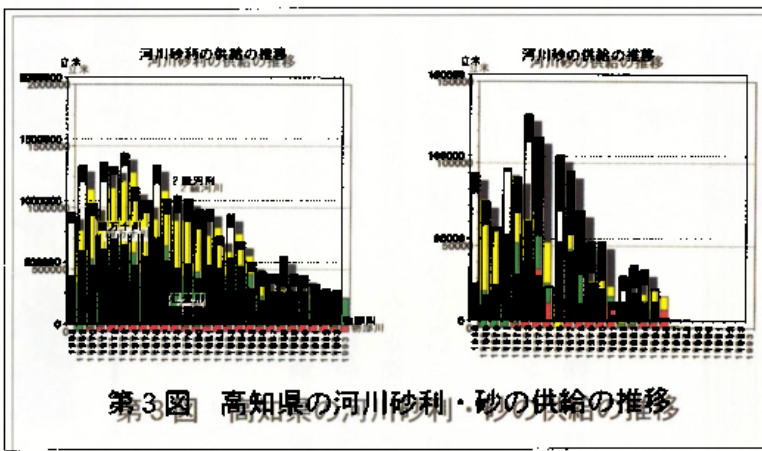
細骨材を安定供給するためには採取地の確保が必要である。山砂・陸砂の一箇所あたりの供給量は一部の地方を除いて、減少の傾向にあり、大規模な開発が困難になってきたことを示している。現状のままでは、わが国全体として、山砂・陸砂に細骨材を依存し続けることは困難になると予想される。

山砂・陸砂に依存してきた地方が西日本の例に習って海砂へ期待するのは当然の成り行きであろうが、細骨材として使用可能な海砂は我が国周辺の大陸棚海域に部分的にしか賦存しておらず、すべての地方が海砂に依存することは困難であると考えられる。

このような事態に対処するために砂の

輸入も論じられ始めているが、外国の砂の性状を調査せずに計画を推進することは危険であろうし、発展途上国においても骨材供給の問題が重要視されて来ている時に、現実的な対応策であるかどうかは疑問であろう。

骨材資源は著しく安価であるため、基本的には需要地の近くに供給地を確保すべき資源であり、安定供給のためには段丘や平野の堆積物の調査を早急に実施して、その結果に基づき計画生産の道を開くことが肝要であろうと考えられる。



高知県の骨材供給の推移
 高知県の骨材の種類別供給量の推移を第2図に示してある。粗骨材としての天然砂利は河川砂利、陸砂利、および海砂利が採取されているが、その総供給量は一九七六年を境として減少の傾向にあり、現在では六〇万立方メートル程度の供給に留まっている。この供給量の半分はいままも河川砂利から供給されている(第3図)。海砂利の利用は日本では稀な例である。天然砂利の供給量の減少にともない、砂岩を原材料とする碎石の生産量は増加しており、一九九〇年の生産量は約二二五万ト

ンである。碎石はコンクリート用と道路用に分けられるが、天然砂利の減少を反映してコンクリート用の碎石が多く生産されている。細骨材としての天然砂の供給量のはとんどは海砂である。海砂の供給量は一九九一年の約一六〇万立方メートルを示している。砕砂の生産は増加の傾向を示しているが天然砂の供給量にはるかにおよばない。

海砂については、採取に原因すると考えられる沿岸浸食などの問題を避けるためと安定供給を目的として陸岸から離れ

た沖合大陸棚に採取地を移行させる傾向にある。しかしながら、高知県の前面の大陸棚には泥質堆積物が広く分布しており、海砂の採取地を広く大陸棚の上に求めることが困難である。それゆえに、高知県の海砂への将来的依存度は著しく小さいものと判断される。結論的には、高知県では骨材の安定供給のための抜本的な対策が必要であろう。

南国市と骨材資源

高知県の骨材の供給が困難になっていくことを予測し、旧河川砂利（陸砂利）の探査が必要になるであろうことを昭和四四年に甲藤次郎先生がその著書「高知県の地質」の中で述べておられ、これは生活に密着した地質学を志された学者ならではの卓見であろう。

私も永い学生時代を過ごした土佐の国には人一倍の愛着を感じているために高知県の骨材供給については他人事ではな

く、甲藤先生等の調査結果をまとめた土地分類基本調査「高知」（五万分の一）を眺めてみた結果、天然骨材資源が眠っているような場所は物部川を中心とした地域であると思われる（第4図）。段丘堆積物は風化が進み、平野部は泥質堆積物から構成されることであるので骨材の採取を期待することは困難であろう。

扇状地堆積物は広い分布面積を持ち、砂礫を主体としたもので、その層厚は200m以上あるとされており、骨材調査の結果によつては高知県の骨材供給の球世主になれる可能性を秘めている。ただし、良質な骨材の開発が可能なが見つかつたとしても、その開発に当たってはオーストラリアの漂砂鉱床の開発に認められる様な自然環境の復原を考慮すべきなのは言うまでもない。

（工業技術院地質調査所海洋底質課長）

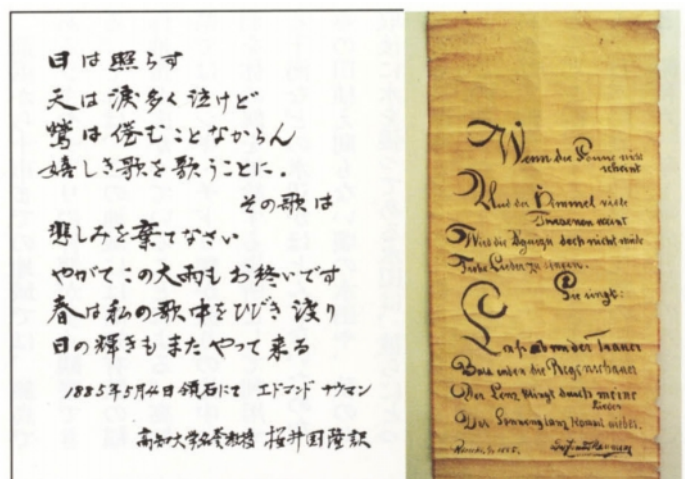
領石とナウマン

甲 藤 次 郎

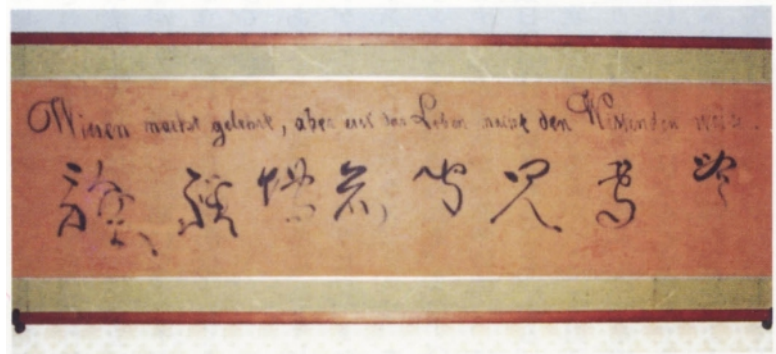
現在、領石は川之江と結ぶ高知自動車道南国インターとしてよく知られている。一方、この周辺地域の「領石盆地」は、約一億年前のシダ植物化石を多産する有

名な「領石層」の分布地として、古くからの地質名所であることを知る人は数少ない。

この領石で最初に地質調査のハンマー



（写真一）領石ゆかりのナウマン自筆の詩（左側は和訳）



（写真二）ナウマンの漢字体による日本唯一の詩軸（ナウマンと親交のあった大塚家所蔵。大塚氏宅で甲藤撮影）

を振つたのは、日本地質学の祖と云われるナウマンで、ナウマンが採集した領石の植物化石が世界で紹介されたのは、佐川の貝化石以前であったと記憶している。高知県でナウマンと云えば佐川を連想する者も多いが、佐川が地質名所となつたのは、ナウマンの業績もさることながら、小林貞一東大名教授の「日本の起源と佐川造山輪廻」と題する劃期的な大論文（一九四二）及びその門下生達による数多くの業績によると筆者はみている。

ナウマンと土地の人達との交流は、佐川では宿の主人で化石産地の案内をした外山 燭との関係はよく知られているが（資料一）、そのような交流の絆が最も深

かったのは領石ではあるまいかと筆者は想っている。この事情は、永国淳哉氏の紹介によつてその片鱗を知ることができ（資料二）。

写真一は、佐川地質館に展示されている種田陽吉氏寄託の詩軸である。また写真二は、漢字で「學專見聞 命増経験」と横書きされており、その上にドイツ語訳が付されている（資料三）。後者は南国市田村出身の大塚恭男氏宅（東京）に掲げられている。何れも領石ゆかりのナウマン自筆の詩であり、地質学界にとつては、国宝、級と云える。

紙面の都合で、領石とナウマンの関係は次の機会に譲るが、最後に付記すると、**「領石層」**は近年になって再定義されており（資料四）、南国インター付近からは見事な海棲のアモンナイトが工事中に発見されたり、最近では恐竜の発見されている。また領石盆地西縁の岡豊からは、良質の療用泉が開発されており、周辺の自然とマッチした芸術性豊かな温泉郷が整備されていると聞く。ナウマンと領石をめぐる歴史発掘、**「領石層」**からの恐竜の発見、岡豊温泉のデビュー等々の夢は是非実現させたいものである。

（高知大学名誉教授・地質学）

南国市の野鳥



豊田陽一

南国市は平野の少ない高知県の中でもかなり広い平野部を有しており、南は太平洋に開け、北は本山町、土佐町とも境を接し標高は一、〇〇〇mあまりある。

そして、市を横切るように浦戸湾へ通じる国分川が流れ、東は物部川に接している。このような多様な環境に恵まれているため、観察される野鳥の種類も多い。南国市における鳥類生息調査等がおこな

資料

- 一、甲藤次郎（一九八二） 研究史を飾る人達と、それらの研究を支えた人達 佐川町史上巻（一〇〇―一八頁） 佐川町
- 二、水国淳哉（一九八六） 上佐の英学史（七） 高知県人（三五巻 第一〇号・二八―二九頁） 高知県人社
- 三、高知新聞記事 ナウマンの漢詩類見つかると（昭・六二・六・一七）
- 四、田代正之・香西 武・岡村 眞・甲藤次郎（一九八〇） 高知県物部村地域の下部白亜系の生層位的研究 甲藤次郎教授還暦記念論文集（四万十帯の地質学と古生物学・七一―八二頁）

われたことがないためはつきりしたこととは分らないが、日本野鳥の会高知支部の記録からみると、高知県で記録された野鳥の六割程度の種類は南国市で観察できるとみてよさそうである。

南国市で観察される野鳥の特徴といえは、春や秋に通過していく渡り鳥（旅鳥）と、越冬のために渡ってくる冬鳥が多いことであろう。そして、これらの渡り鳥



チュウシャクシギ

の探鳥地としては、前浜・浜改田・里改田・十市地区と、石土池があげられる。前浜から十市までの地域では、旅鳥であるシギやチドリ仲間が多く観察できる。それは、この地域には高知有数の稲作地帯が広がっていることによる。高知県では、シギ・チドリ類が渡りの途中に羽を休め餌を補給する場所として利用する干潟などの水辺がほとんどないためか、春の出植え間もない頃の水田や、秋の刈取後に水を張つてある水田は、彼らにとって非常に貴重な渡りの中継地になっている。この前浜から十市までの地域だけで、高知県で観察されるシギ・チドリ類のほとんどを観察することができると思われる。日本野鳥の会高知支部の記録によると、昭和六一年―平成五年の八年間でこ



セイタカシギ

の地域で三五種のシギ・チドリ類が確認されている。ただ、近年水田の作付体系の変化や耕作面積の減少、埋め立て開発等が進み、渡りの時期にシギ・チドリ類が立ち寄れる条件の場所は少なくなっている。

あと、この地域では冬に、セキレイ類、タゲリ、ヒバリ、カワラヒワ、ミヤマガラス、コクマルガラス、ノスリ、チョウゲンボウなどが見られる。またナベヅル、マナヅルが晩秋から初冬の頃に、ほんの数日間だけ確認されることがある。

次に石土池であるが、ここは県下有数のカモ類の越冬地であり、高知県で観察されるカモ類のほとんどを観察できる。日本野鳥の会高知支部の記録によると、昭和六一年―平成五年の八年間で石土池



マガモ



オオバン

られるものはマガモ、ヒドリガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヨシガモなどであり、マガモが最も多い。逆に記録の少ないものとしてはマガン、カワアイサ、ミコア



レンカク

イサ、アカハジロ、アメリカヒドリ、トモエガモ、オシドリ等があげられる。記録の少ない種の内オシドリを除いては、いずれも四国では記録が非常に少ないか、毎年記録はあっても渡来数が極端に少ない希少な種である。あと、オシドリは山間部の河川やダム湖に渡来し、石土池のような所で記録されることはめずらしい。ガンカモ科以外では、クイナ科のオオバンが毎年一〇〇羽以上越冬し、多いときは二〇〇羽近くが確認されている。この鳥の日本での分布は局所的であり、主に本州中部以北で繁殖し、西日本では一部繁殖の確認されている所はあるが主に冬鳥としてやってくる。石土池はオオバンの越冬地としては四国一であり、西日本でも貴重な越冬地の一つに入るのではな

いかと思われる。

他にもこの石土池では貴重な野鳥が記録されている。平成六年の秋には日本では極まれにしか見られない迷鳥とされるレンカクが三羽も現れ、他県からも多くのバードウォッチャーが訪れた。レンカクは昭和六一年の秋にも一羽記録されている。ほかには琉球列島以外ではまれな冬鳥または旅鳥とされるムラサキサギが、やはり平成六年の秋に一羽現れ、昭和六三年の秋にも一羽記録されている。

しかし、この石土池も観察記録からみると平成三年度あたりからカモ類の生息数が年々減ってきている。原因については、水質や水生植物の変化や周辺地域の開発、釣りの影響等が考えられるが、何が一番の原因なのかは今のところ分からない。

さて、前記の二つの地域以外については、国分川の高知市との境に近いあたりにもいろいろな野鳥を観察できる。冬に

やってくるカモ類の他、カワセミ、カイツブリ、サギ類などの水辺の鳥や、河畔や周囲の畑地ではツグミ、ジョウビタキ、アオジなどの冬鳥やキジバト、ホオジロ、ムクドリ、ヒヨドリ、モズなどの身近な鳥が観察でき、上空にはハヤブサが現れたりもする。

山間部については、観察記録が少ないためわからないが、市の最北部にあたる黒滝川上流あたりでは、初夏のころはオオルリなど夏鳥のさえずりがしているとされる。これら山間部については今後の観察により、より多くの野鳥が確認されることと思われる。

このように、南国市は地理的条件にめぐまれ、県下でも貴重な野鳥の生息地がある。今後、これらの地域をどのように後世に残していくかは、重要な問題であろう。

(日本野鳥の会高知支部幹事)

南国市の植物

稲垣 典 年

南国市は土佐湾より北山の笹ヶ峯(一、一三・四m)までの変化に富んだ地でありながら、平地では水田等の耕作地、

山地も植林が多く自然植生のすくない所です。それでも、貴重な植物が点在しています。いくつか拾ってみます。



コウボウムギ

一、海岸線

浜改田を中心とした海岸線は砂浜ばかりでハマゴウ、クコ、ハマヒルガオ、コウボウムギ、ハマスゲ、ギョウギシバが目立ち、ギシギシ、ハマエンドウ、ハマエノコロ、ハマボウフウ、カワラナデシコ、メドハギや、帰化植物のオシロイバ



シ ョ ウ ブ



サ ク ラ タ デ

ナ、マンテマ、コマツヨイグサが点在しています。

二、石土池

冬の野鳥観察で有名な石土池も夏はハスがみごとに咲き、大ぜいの見物客でにぎわいます。池にはガガブタ、ヒシ、スイレン、ホテイアオイが見られ、岸辺に



ノ カ ン ゾ ウ



ヤ ド リ ギ

はすっかり少なくなったシヨウブがあり保護したいものです。又、近くの休耕田ではガマ、ミゾソバ、ジュズダマ等によりつつてサクラタデが健在なのはうれしいことです。

三、伊達野

宅地造成などですっかり昔のおもかげ



ツ ル グ ミ

はなくなったものの、ノカンゾウ、ハンゲシヨウ、バランギボウシ、スイランといった絶滅危惧種がほそほそと見られます。又、香長平野に点在する鎮守の森では、エノキやムクノキに寄生したヤドリギが目にとまります。

四、外山神社

国道三三号線の根曳坂の左手、深い谷となつたところにある外山神社では、一番にツルグミにおどろかされます。根本で二本にわかれる幹は、それぞれ周囲四〇cmもあり、高さ二〇mもあるアラカシ、イスノキ、カゴノキ、スタジイによじのほり、これらの木をおおいつくしています。みことなツルグミです。境内ではほかにスギ、カナメモチ、クスドイゲ、ヤブツバキ、サカキ、イチイガシ、クロガネモチ、ムクノキ、アリドウシ、アオキ、イタビカズラ、ツルコウジ、セントウソウ、ヤブハギ、フユイチゴ、ハエドクソ



タチバナ

ウ、ハナミヨウガ、サネカズラ、ナツフジ、シュンラン、コ克蘭、フジカンゾウ、キチジョウソウ、アキノタムラソウ、ノブドウ、イタドリ、ヒガンバナが、シダ植物では、ヒトツバ、カタヒバ、ノキシノブ、マメズタ、ホシダ、ホソバカナワラビ、コウザキシダ、タチシノブ、ヘラシダ、カニクサ、アマクサシダ、イタチシダ、オオバノイノモトソウ、イシカグマ、イブキシダがあり、とくにコウザキシダが群れています。

五、白木谷のタチバナ（県指定天然記念物）

周辺には秋の味覚であるシホウチクが栽培されており、モウソウチク、アラカシ、エノキ、アカメガシワが見られ、タチバナの足元にはコアカソ、イタドリ、

ヤクシソウ、タカサゴユリ、ホシダ、イノデ、ヤブソテツ、コヤブラン、シヤガ、ヒガンバナが、石垣にはコバノヒノキシダ、イタチシダ、カニクサ、クマワラビ、ナガバノヤブソテツ、イノモトソウ、オクマワラビ、アマクサシダが目立ち、幹々にはマメズタ、ノキシノブが着生しています。

六、桑の川の鳥居杉

地主神社の参道石段の両側に鳥居そっくりになった杉で別名連理杉ともいいます。境内ではアカガシ、バリバリノキ、シロダモ、ヒサカキ、サカキ、ヤブツバキ、イロハカエデ、オオモミジ、ウラジロガシ、アカシデ、クマヤナギ、イヌツゲ、ヤブムラサキ、アカメガシワ、オンツツジ、コガクウツギ、シキミ、ハイノキ、ヤブコウジ、フユイチゴ、コアカソ、



ユキモチソウ

コヤブラン、アキノキリンソウ、ムベ、テイカカズラ、ツルリンドウ、ナンカイアオイ、キツコウハグマ、マメズタランが、シダ植物としてクマワラビ、オオイタチシダ、ヒトツバ、シノブ、マメズタ、イワヤナギシダ、ウラジロ、シシラン、オオキジノオ、キジノオシダ、ゼンマイ、コウヤコケシノブ、トキワシダ、シシガシラ、ヌリトラノオ、トウゲシバ、ベニシダ、イノデが見られます。

七、瀬戸の滝

鳥居杉からほど近い所にあり、小さいながらも滝つほの美しい滝です。数本のアカガシの太木が目立ち、スギ、アセビ、サカキ、シキミ、ヤブツバキ、ヒサカキ、ハイノキ、イロハカエデ、コガクウツギ、オンツツジ、ヒカゲツツジ、ウンゼンツツジ、コハウチツカエデ、バリバリノ

瀬戸の滝

コハウチツカエデ、バリバリノ

キ、ハマクサギ、ヤブムラサキ、ヒメシヤラ、ウメモドキといった樹木やイヌコウジユ、マツカゼソウ、チャボホトトギス、ナンカイアオイ、ダイモンジソウ、ジンジソウ、イワタバコ、シロバナシヨウジョウバカマ、ヤブタバコ、オタカラコウ、アケボノソウ、ユキモチソウの草本、シダ植物としてクマワラビ、シシガシラ、ミヤマノコギリシダ、シシラン、ヌリトラノオ、ホソバコケシノブ、オオキジノオ、キジノオシダ、オオフジシダ、カタヒバ、トキワシダ、イノデ、イノデモドキ、ヒメノキシノブ等が見られます。なおウンゼンツツジは南国市で初記録かもしれませんが、だとすると西端の分布ということになります。



中ノ川



ネ コ ヤ ナ ギ

八、中ノ川
南国市の最北部にあり、カワノリ（セ
イラン）で知られる川で紅葉もすばらし
く、キャンプ地としてもいいところだ。
川の両側にはイロハカエデ、オオモミジ、
ウリカエデ、コハウチワカエデ、ウラジ
ロガシ、ツガ、ヤマザクラ、アカシデ、
ヒサカキ、ヤブツバキ、アカガシ、アセ
ビ、ハイノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、
キブシ、ヒカゲツツジ、トサノミツバツ
ツジ、ベニドウダン、ヤマグルマ、ネコ
ヤナギの樹木や、ツリフネソウ、ヤマル
リソウ、アケボノソウ、アカバナ、トサ



ツリ フ ネ ソ ウ

ノミカエリソウ、チャボボトト
ギス、セキシヨウ、アワモリシヨ
ウマ、シロバナシヨウジョウバ
カマ、クサヤツデ等が見られま
す。このツリフネソウ、南国市
としてめずらしいでしょう。

（牧野植物園技監）

南国市は高知市の東に位置している、

東を物部川で野市町と境し、南は土佐湾

南国市とその周辺の昆虫

川 澤 哲 夫

に面して温暖で、早期栽培のイネや施設
野菜の栽培が盛んな農業地域と、北方は
標高一、〇〇〇m級の山地で土佐町や十
佐山村と接している森林地域とに区分す
ることができる。そのような生物環境に
棲息している多くの昆虫のなかで、と
くに留意しておく必要がある種について
紹介する。

●美麗な昆虫・ニシキキンカメムシ

一九八六年の〈夏休み子ども教室〉に
持参された昆虫標本の中に、この美麗な
カメムシが発見されたのを契機に追跡調
査が行われ、南国市の毘沙門滝の樹木や
その周辺から多数採集されたのが、高知
県から発見された最初の記録である
〔げんせい〕一九八七年〕。

体の大きさは約一六ミリと大形のカメ



ニシキキンカメムシ（高井氏原図）

ムシで、一九三五年にニシキキンカメム
シとして発表され、一九三六年の論文
〔Mushi〕には「本種の如き大形な美
麗種が最近まで未知であったことは意外
であり……生時の色彩の美しいことは記
載し難い程で、同属のアカスジキンカメ
ムシなどは本種と較べたら問題にならな
い」とまでに書いてある。属名のPoecil-
ocorisはギリシャ語で「美しいカメム
シ」の意味で、種名のSplendidulusはラ
テン語で「すばらしい」の意味をもって
いて「すばらしく美しいカメムシ」とい
う名前にふさわしいカメムシである。

南国市の毘沙門滝で発見されてから間
もなく、本種の食餌植物がツゲであるこ
とが判明し、次いで隣接の土佐山村から
も発見されたことから〔げんせい〕



ヒラズゲンセイ

一九九一年、南国市の山地にも棲息していることであろう。ニシキキンカメムシと間違われる種に、普遍的に分布しているアカスジキンカメムシがいる。

●謎の多いヒラズゲンセイ

トサヒラズゲンセイは、安芸市を原産地として記載（「インセクタマツムラナ」一九三六年）されたが、その後、ヒラズゲンセイと改称された（「甲虫ニュース」一九八五年）。体の大きさは約3cmの鮮紅色をした美しい甲虫である。

一九五二年（昭和二十七年）に創立された高知昆虫同好会（その後、高知昆虫研究会と改称）の機関誌名は、この甲虫の名に由来して「げんせい」とつけられている有名な昆虫である。高知県では須崎市より東方の各地でときどき発見されていて、南国市では大桶から採集されている。

本種の生活史は不明な点が多く謎にまつまれているが、これまでの知見では、クマバチの巣孔の奥に卵が産まれ……年齢幼虫がクマバチの体に乗って分散……クマバチが訪花する植物に移り……成虫になって再びクマバチの巣に入り産卵する、という興味ある生活環が知られている。このような生活史の解明に挑戦していた石田明義氏（故人）は、高知市で開催された日本昆虫学会第四〇回大会で研究成果を発表して、謎の解明を一步前進

させた。

●生きた化石昆虫・ガロアムシ

南国市天行寺の周辺には、石灰岩の洞窟が知られているが、地下の暗がりの世界にも学問的に貴重な昆虫が棲息している。ガロアムシは体の大きさが三センチほどで、分類学的にはゴキブリやバッタの中間型をした昆虫として知られているが、本種はさらに洞窟の環境に適応した体の構造をもった種で、まだ分類学的な位置づけができていない。

洞窟のような環境の変化が少ない地下の世界に棲みついたため、昔のままの体型を保っている昆虫を（生きた化石）と呼んで、昆虫の進化や分布の変遷を知るうえで珍重している。

●外国から侵入した昆虫

イネミズゾウムシ

体の大きさは約3mmで、体の大部分が灰色の泥状物でおおわれている。以前からイネの害虫として知られているイネゾウムシによく似たゾウムシである。

日本では一九七六年に愛知県の水田から最初に発見され、研究の結果アメリカでイネの害虫にされているイネミズゾウムシであることが判明した。日本にはカリフォルニアから輸入した乾し草とともに持ち込まれた疑いがあるといわれている。

その後、分布を拡大しながら一九八三年に高知県へ侵入して、早期栽培のイネを加害する害虫として注目された。



ガロアムシの1種



イネミズゾウムシ（高井氏原図）



ミナミキイロアザミウマ（高井氏原図）

ミナミキイロアザミウマ

体の大きさは約1mmの紡錘形をした小さい昆虫であるが、二・三科七種の植物に寄生することが知られ、キュウリ、メロン、ナスなどの多くの作物に被害が大きい。

本種は東南アジアに広く分布していて、一九七八年に宮崎県で初発生が認められた。一九七九年には須崎市に発生し、にわかには県下全域に分布が拡大した昆虫である。

和名は「南（ミナミ）から来た黄色い（キイロ）薊馬（アザミウマ）」が、本種の特性をよく表現しているといえる。

（高知昆虫研究会）

〔シリーズ〕

鎮守の森

-その四十八-



桑の川、地主神社々叢

山脇哲臣

鎮守の森は魂のふるさとであり、失われてゆく自然が最後まで残っているところである。いま一度ふるさとの自然を身近なところにふりかえってみよう。

南国市の北端隅の穴内川上流、桑の川の集落の少し奥まった所にある。標題は、地主神社の杜叢ということになっているが、実際には桑の川の鳥居杉、又は連理杉で有名である。

この奇態を早する杉を知ったのは、亡くなった有名な溝淵忠広紀元節校長からであった。「哲臣あそこに珍しい杉がある天然記念物にせい」という命令だった。といっても終戦直後の頃、交通の便はなくて歩いて井ノ沢、上倉を通ってのことだった。その後この杉のことは何回も書いた。高知県の出版した名木集にも勿論書き入れた。又一昔「飼育と採集」という写真を主にした雑誌があり、それに寄稿したら、全頁写真という優遇をうけたこともある。枝が二本の幹を略日状になくという、稀有な現象であるが、それが夫婦間のきずななど、重ねあわせての目出度さもあって、古い天然記念物調査報告書にも、たしか黒松の連理となったものが、島根県で指定されていた記憶があ

る。こうした記事にはまことに不確かなことを書いて申し訳ないが、詳しいことを調べる程の時間がない。私もそれを読んでいて、それを連理ということなら、桑の川がはるかに立派だから、これぞ口本一の連理杉と思つて、「飼育と採集」に寄稿したのだった。又現地の案内板にも日本一と書いてあるが、実際には屋久島の小杉谷の奥、ウイルソン株の少し奥に、桁違いの巨大な連理杉がある。この木は夕暮にみると鬼気迫るものがある。木の枝が高い所で合着すると窓木と呼ぶ。民俗学的には山の神は、その窓の所を通過して天に登るといふ。

桑の川の連理杉も、どちらの枝が出てきて合着したかは、不明である。ただいろんな木を見ていると、先の尖ったものが、木の幹に直角にあたり、そのあたった木が盛んに肥大している場合、割とそれをまきこみやすいもので、きわめて少ない確率ながら、こんな珍奇な現象として奇態を早する樹木ができるのであろう。

案内板によると、

大きな杉高さ四〇米、周開六米、樹令三〇〇年

小さな杉の方は標示がないが高さ三〇米、周開四・五米に、樹令二五〇年と推定され、木と木の間は三米、枝下は三・五米程あるではなからうか。

日本一ではなくても、まことに立派な

連理の杉であり、且つ大きな方の杉は単木でも名木の大きさを持つている。

杜叢の周縁は、一昔と様子を、変じていて、若い造林地となっており、その中にチャートの大きな岩場が露出しており、その岩山全体が杜叢としてあり、特有の植生を保っている。

それらの植物をメモしてみると、高木に、ツクバネガシ、ウラジロガシ、ヤマザクラなど、ヤブツバキ、テイカカズラ、イロハモミジ、アセビ、ヒサカキ、ヤブニツクイ、スギ、ヒノキ、シロドウダンなど又、シダ植物のシシランがよく発達し崖壁に着生している。

※表紙参照

(元牧野植物園園長)

編集委員

県自然環境保全審議会委員

甲 藤次郎

山 崎清憲

山 脇哲臣

県山岳連盟会長

国 沢 鎮 雄

この冊子は再生紙を使用しています